

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02705

研究課題名（和文）大学のレピュテーション・マネジメントの推進のためのIRの活用のあり方に関する研究

研究課題名（英文）Research on how to use IR to promote university reputation management

研究代表者

高田 英一（Takata, Eiichi）

神戸大学・戦略企画室・准教授

研究者番号：60336039

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：国立大学に対するレピュテーション・マネジメント（以下、RM）に関する調査では、RMの知識がある大学は半数以下だが、これらは全てRMを重要と認識し、知識のない大学も80%以上が今後重要になると認識していた。また、約半数の大学がIRをIRに関する取組に活用しており、未活用の大学も約80%が活用すべきと回答した。また、全大学に対するRMの取組に関する調査では、大学ランキングに対する取組は、全体で半数以上、国立大学や大規模ほど多く実施し、また、大学から個別指標ごとやわが国独自のランキングを多く情報提供していた。課題としては、順位の算出方法が不明確、取組に必要な知見の不足、取組のコストが多かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究開始当時、経営環境の悪化を踏まえて、社会の支持を獲得するため、大学においてもレピュテーションマネジメント（以下、RM）の重要性が叫ばれていたが、その実態は明らかでなく、各大学において個別に取組を模索する状況であった。このような状況において、大学におけるRMの取組の全体状況や課題とともに、RMにおけるIRの意義を明らかにしたところに学術的な意義がある。また、この結果を基に、今後、各大学においてRMの取組を進めることができること、社会としても大学ランキング等の大学におけるRMに対する意識を把握し、大学に対する認識の形成に活用できることに社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：In a survey on reputation management for national universities, less than half of the universities had knowledge of RM, but all of them recognized RM as important, and more than 80% of universities without knowledge recognized that it would become important in the future. In addition, about half of the universities responded that they are using IR in IR-related initiatives, and about 80% of the universities that are not yet using IR said they should. In addition, in a survey of RM initiatives for all universities, more than half of all universities implemented initiatives for university rankings, and national universities and large universities were more likely to implement them. Issues included unclear ranking calculation methods, lack of knowledge necessary for efforts, and high cost of efforts.

研究分野：教育社会学

キーワード：レピュテーションマネジメント IR インスティテューショナルリサーチ ランキング

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、日本の大学を取り巻く経営環境は厳しさを増しており、ステークホルダーから十分な理解と支持を獲得するための取組として、「ステークホルダーによる認知の集積」であるレピュテーション(reputation、評判)を高め管理するレピュテーション・マネジメントを推進する必要が叫ばれていた。しかし、大学におけるレピュテーション・マネジメントのあり方は確立しておらず、各大学で個別に取組を模索している状況であった。また、大学には多様なステークホルダーと大量の情報があるため、レピュテーション・マネジメントに必要なステークホルダーとの統合的なコミュニケーションの実現には、大学のデータ・マネジメントに携わる Institutional Research (以下、IR) の活用が期待されるが、そのあり方も模索中の状況であった。

## 2. 研究の目的

1. を踏まえて、本研究では、日本の大学のレピュテーション・マネジメントの推進のあり方とレピュテーション・マネジメントの推進のための IR の活用のあり方を明らかにすることを目的とした。

研究開始当初の時点では、前者の大学におけるレピュテーション・マネジメントの推進に関する先行研究は、管見の限り、英国の事例紹介や国内の事例紹介(荒木 2017)はあったが、そのあり方については研究代表者・分担者の研究(高田・大石 2016)以外にはなかった。また、後者のレピュテーション・マネジメントへの IR の活用に関する先行研究は、管見の限り、研究代表者・分担者の研究(高田・大石 2016)以外にはなかった。この点は、IR の発祥である米国も同様であった。すなわち、ヴォルクワインによる米国の IR の機能の 4 側面(Volkwein et al.2012)では、レピュテーション・マネジメントは「スピンドクター」(情報を操作し、自陣に有利となるように世論等を導く専門家(藤原 2016))に該当するが、実際の米国の大学では、この分野は広報部門が担当(藤原 2016)しており、学内のレピュテーション・マネジメントの専門家が積極的な情報発信を担当している。ただ、米国の大学では IR が個別のニーズに応じて個別に発展してきたこと(小林他 2011)を踏まえると、日本の大学では、今後、IR が「スピンドクター」すなわちレピュテーション・マネジメントに関する機能が独自に発展することは十分予想される。このように、本研究は、レピュテーション・マネジメントの推進のための IR の活用という日本独自の IR のあり方に関する研究という点で学術的独自性と創造性があった。

### (参考文献)

- ・荒木利雄(2017)「わが国の大学経営における国際競争力向上のためのレピュテーション・マネジメントの役割と意義 - 九州大学と広島大学の事例研究による分析」『ビジネス & アカウンティングレビュー』19号.41 - 59.
- ・小林雅之・片山英治・劉文君(2011)『大学ベンチマークによる大学評価の実証的研究』東京大学・大学総合教育研究センターものぐらふ 10
- ・高田英一・大石哲也(2016)「研究大学におけるレピュテーション・マネジメントのあり方について: IR の観点を中心に」『広報研究』(20), 165-172
- ・藤原宏司(2016)「スピンドクターとしての IR」に関する一考察」『大学評価と IR』第 5 号(平成 28 年 3 月)
- ・Volkwein, J., Liu, Y., & Woodell, J. (2012). The Structure and Functions of Institutional Research Offices. In R. D. Howard,

## 3. 研究の方法

(1) 大学のレピュテーション・マネジメント、IR の研究確認のための文献調査

(2) World 100 Reputation Network の主催の国際会議 W100 Annual Conference 2018 (Vancouver, Canada 27-28 September 2018) への参加と大学における国際的なレピュテーション・マネジメントの状況に関するヒアリング調査

(3) 国立大学に対するレピュテーション・マネジメントに関する取組についての意識・実態に関するアンケート調査アンケート調査による国内大学のレピュテーション・マネジメント、IR に関する意識・取組状況・課題の把握

(4) 日本の大学の Web ページにおける大学ランキングのランクインに関する情報の活用状況に関する調査

(5) 我が国の全大学に対するレピュテーション・マネジメントに関する取組のアンケート調査

(6) 各研究の成果は、研究代表者らの IR 業務の実践を通じた検証を行った。また、研究分担者が事務局を務める機関調査研究会(MJIR)等で報告し、関係者との共有と意見交換を行った上で、関係学会等で発表した。このように、研究全体として、関係者との意見交換を踏まえて、さらに研究を進めるというサイクルを機能させた。

#### 4. 研究成果

(1)平成30年度においては、わが国では、これまで大学におけるレピュテーション・マネジメントのあり方に関する先行研究がほとんど見当たらない現状を踏まえて、今後の研究の基礎として大学のみならず、企業等のレピュテーション・マネジメントの研究状況の確認のための文献調査を行った。

また、大学のIRに関しては、研究代表者・研究分担者が所属大学において担当しているIR業務の遂行を通じて知見の深化を図るとともに、先進的な取組に関する文献調査等を行った。さらに、レピュテーション・マネジメントに取り組んでいる大学の国際的なネットワークであるWorld 100 Reputation Networkの主催の国際会議W100 Annual Conference 2018( Vancouver, Canada 27-28 September 2018)に参加し、大学における国際的なレピュテーション・マネジメントの状況についてヒアリング調査を行った。これにより、レピュテーション・マネジメントに関する先進的な大学の取組状況等を把握することができたが、現時点では、レピュテーション・マネジメントへのIRの活用事例はほとんど見られない状況が明らかになった。

以上の研究成果については、本科研費によって開催した「大学IR集中講習会」(平成31年2月27日~28日開催、東京国際フォーラム)における研究代表者及び研究分担者の講演を通じて、大学等のIR実務担当者に対して、知見をフィードバックし、共有を図るとともに、意見交換を行うことで知見の深化を図った。

(2)令和元年度においては、平成30年度に実施したレピュテーション・マネジメントに関する文献調査や大学における国際的なレピュテーション・マネジメントの状況についてのヒアリング調査を元に、国立大学に対するレピュテーション・マネジメントに関する取組についての意識・実態に関するアンケート調査を実施した。調査はWebを用いて行い、回答率は33.7%であった。回答では、レピュテーション・マネジメントを「知っている」と回答した大学は半数以下にとどまったものの、「知っている」と回答した大学はすべてレピュテーション・マネジメントを重要と認識し、「知らない」と回答した大学も、80%以上が「今後重要になる」と回答した。また、広くレピュテーション・マネジメントに関係する取組については、80%以上の大学が実施しており、現在は、高校生・高校を主な対象としているが、今後は、卒業生・企業を対象とすべきと考えていた。さらに、レピュテーション・マネジメントへのIRの活用については、現在約半数の大学が活用しており、現在活用していない大学も約80%の大学が今後活用すべきと考えていることが明らかとなった。これらの分析結果から大学においてもレピュテーション・マネジメントの重要性が認識されている状況が明らかになった。

以上の分析結果については、日本教育情報学会第35回年会(令和元年8月25日)において報告「わが国の国立大学におけるレピュテーション・マネジメントに関する意識と取組及びIRの活用の実態」等を行うとともに、参加した大学のIR関係者と情報共有と意見交換を行い、知見の深化を図った。

(3)令和2年度においては、令和元年度に国立大学を対象として行ったレピュテーション・マネジメントの取組に関するアンケート調査の結果をまとめて、論文として公表した。論文では、調査の結果から、レピュテーション・マネジメントの重要性が多くの大学で認識されるとともに、レピュテーション・マネジメントに関する取組が実施されていること、また、レピュテーション・マネジメントへのIRの活用の必要性が認識されている状況が明らかとなったことを指摘した。

また、レピュテーション・マネジメントの取組の有力なツールである大学のWebページに着目し、大学が「自大学のランクイン」に関する情報をWebページに掲載していることを大学ランキングのレピュテーション・マネジメントへの活用事例と見なした上で、日本の大学のWebページにおける著名な大学ランキングへのランクインに関する情報の掲載状況の調査を行い、その結果を学会に報告した。学会報告では、ランクインした全ての大学が大学ランキングをレピュテーション・マネジメントに活用しているわけではない状況を踏まえて、各大学では順位の高さだけでなく、各ランキングの評価項目、ステータス等の要素を考慮した上で、レピュテーション・マネジメントへの大学ランキングの活用に関する判断を行っているとの推察等を指摘した。

さらに、新型コロナウイルス感染症の流行状況を見据えつつ、上記の調査結果を踏まえて調査項目の検討を行った上で、我が国の全大学を対象としてレピュテーション・マネジメントに関する取組のアンケート調査を実施した。その際、特に重要な意義がある大学ランキングについても調査を行った。

(4)令和3年度においては、令和2年度に全大学を対象として行ったレピュテーション・マネジメントの取組に関するアンケート調査の分析を行った。この結果、特に大学におけるレピュテーション・マネジメントにおいて重要な意義がある大学ランキングに関しては、半数以上の大学が大学ランキングに対応するための取組を実施している状況にあるが、設置形態別に見ると、国立大学が最も高く、公立大学が最も低く、また、規模の大きいほど多くの大学が取組を行っていた。また、ステークホルダーに情報提供をしたことのある「大学ランキング」は、個別指標ごとのランキングやわが国独自のランキングが多く、提供の理由は、順位が高いこと、大学の個性・特色を説明できること、であった。また、大学ランキングの取組の課題としては、順位の算出方法が不明確、取組に必要な知見の不足、取組のコスト、が多かった。さらに、大学の関心は必ずしもレピュテーション・マネジメントまで及んでいない状況が示唆された。この分析結果は、国際学会において報告するとともに、国内学会誌に投稿・掲載された。

また、それまでの研究成果(論文3報(内英語論文1報)、学会等報告7報等)を取りまとめ

た研究成果報告書を作成し、調査協力大学等（200 大学）に配布し、研究成果の共有を行ったことで、計画した研究を遂行した。

（5）その後、報告書の配布大学からの質疑等の状況を踏まえて、より広く関係者との意見交換を意図して、令和 4 年度まで補助事業期間を延長し、研究会の開催の可能性を探った。しかし、開催予定時期に新型コロナウイルス感染症の流行の波が到来し、その時点で収束の時期を見通せなかったため、結果的に未開催となったが、上記のとおり計画した研究は完了している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高田英一, 大石哲也, 森 雅生, 関 隆宏, 小柏香穂理, 劉 沙紀	4. 巻 37
2. 論文標題 我が国の大学における大学ランキングに関する取組の現状と課題 - レビュー・テーション・マネジメントの取組に関するアンケート調査の結果を基に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育情報研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tetsuya Oishi, Kahori Ogashiwa, Eiichi Takata, Saki Liu, Takahiro Seki, Masao Mori	4. 巻 29
2. 論文標題 Presentation and Coping Problems of University Ranking in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings 2021 10th International Congress on Advanced Applied Informatics IIAI-AAI 2021	6. 最初と最後の頁 287, 290
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田 英一、大石 哲也、森 雅生、関 隆宏、小柏 香穂理、劉 沙紀	4. 巻 36
2. 論文標題 国立大学におけるレビュー・テーション・マネジメントに関する意識と取組及びIRの活用の実態	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育情報研究	6. 最初と最後の頁 87～93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20694/jjsei.36.2_87	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kahori Ogashiwa, Eiichi Takata, Tetsuya Oishi, Masao Mori,	4. 巻 -
2. 論文標題 Automatic Estimation and Feature Word Analysis of Universities	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the International Congress on Advanced Applied	6. 最初と最後の頁 39-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kahori Ogashiwa, Eiichi Takata, Tetsuya Oishi, Masao Mori,	4. 巻 -
2. 論文標題 Text Mining and Logic Model for University Midterm Plans	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 8th International Congress on Advanced	6. 最初と最後の頁 1013-1014
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田英一	4. 巻 605
2. 論文標題 IRからみた大学教育改革	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 IDE 現代の高等教育	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 高田英一, 大石哲也, 森雅生, 関隆宏, 小柏香穂理, 劉 沙紀
2. 発表標題 我が国の大学におけるレピュテーション・マネジメントの現状と課題 - 国公私 立大学を対象としたアンケート調査の結果を基に -
3. 学会等名 日本教育情報学会年会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高田英一, 森雅生, 大石哲也
2. 発表標題 大学におけるレピュテーション・マネジメントへの大学ランキングの活用の現状と課題について
3. 学会等名 日本教育情報学会年会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高田英一、大石哲也、森雅生、関隆宏、小柏香穂理、劉沙紀
2. 発表標題 わが国の国立大学におけるレピュテーション・マネジメントに関する意識と取組及びIRの活用の実態
3. 学会等名 日本教育情報学会 第35回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大石 哲也、劉 沙紀、小柏 香穂理、関 隆宏、高田 英一、森 雅生
2. 発表標題 世界のレピュテーション・マネジメントの現状と日本におけるIR担当者の意識
3. 学会等名 日本教育情報学会第35回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森雅生、大石哲也、小柏香穂理、高田英一、白鳥成彦、田尻慎太郎
2. 発表標題 大学経営の活用に向けた大学情報の流通に関する課題
3. 学会等名 日本教育情報学会第35回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masao Mori, Tetsuya Oishi
2. 発表標題 About A Role on Information Management for Institutional Research
3. 学会等名 The Annual Conference of South East Asia Association of Institutional Research 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大石 哲也、劉 沙紀、小柏 香穂理、関 隆宏、高田 英一、森 雅生
2. 発表標題 レピュテーション・マネジメントの推進に向けたIRのあり方-教学IR分析の観点から-
3. 学会等名 日本教育情報学会第34回年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大石 哲也
2. 発表標題 W100 Annual Conference 2018参加報告
3. 学会等名 第8回大学IR集中講習会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高田英一
2. 発表標題 大学におけるレピュテーション・マネジメントとIRの活用
3. 学会等名 第8回大学IR集中講習会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小柏香穂理, 高田英一, 大石哲也, 森雅生, 廣川佐千男
2. 発表標題 中期計画を対象としたロジックモデルの各構成要素における特徴語分析
3. 学会等名 第7回 大学情報・機関調査研究会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 劉沙紀
2. 発表標題 レピュテーション・マネジメントのためのデータベースの活用 - 九州大学IR室の取組 -
3. 学会等名 第8回大学IR集中講習会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森 雅生 (Mori Masao) (20284549)	東京工業大学・企画本部・教授  (12608)	
研究分担者	関 隆宏 (SEKI Takahiro) (30380546)	新潟大学・経営戦略本部・准教授  (13101)	
研究分担者	大石 哲也 (Oishi Tetsuya) (30552236)	九州工業大学・学習教育センター・教授  (17104)	
研究分担者	小柏 香穂理 (OGASHIWA Kahori) (60379922)	お茶の水大学・教学IR・教育開発・学修支援センター・講師  (32643)	
研究分担者	劉 沙紀 (LIU Saki) (50773933)	九州大学・インスティテューショナル・リサーチ室・助教  (17102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------